

学術情報

〔東女医大誌 第60巻 第12号〕
〔頁 1071~1077 平成2年12月〕

第10回学内免疫談話会

日 時 平成2年7月7日(土) 午後1:30より

会 場 東京女子医科大学中央校舎1階会議室

会長挨拶

吉岡 守正 (学長)

座長 押味 和夫 (第1内科)

1. 肝癌に対する CTL 療法の基礎と臨床

有賀 淳・山内 克巳・高崎 健・

古川 隆二・済陽 高穂・次田 正・

小幡 裕・羽生富士夫・小林誠一郎

(消化器センター外科・内科)

2. 放射線全身照射マウス follicular dendritic cell (FDC) 抗原捕捉能

安藤 明子・長谷川かをり・西川 俊郎・

増田 昭博・笠島 武 (第2病理)

3. 顆粒リンパ球増多症細胞の増殖機構

星野 茂・押味 和夫・溝口 秀昭 (第1内科)

座長 山内 克巳 (消化器内科)

4. キラーT細胞と bispecific 抗体の併用による

特異的抗白血病細胞障害作用

押味 和夫・溝口 秀昭 (第1内科)

5. A群レンサ球菌発熱性外毒素によるマウス T細胞の

活性化の機序について

今西 健一・内山 竹彦 (微生物)

6. 小児ネフローゼ症候群におけるリンパ球サブセットの検討

久保田令子・服部 元史・甲能 深雪・

川口 洋・伊藤 克己 (腎小児)

座長 早坂勇太郎 (腎臓外科)

7. EBウイルスが原因と思われる dry eye とシクロスポリンの

涙液分泌に及ぼす影響について

亀井 裕子・出海 陽子・

高野 真綾・宮永 嘉雄 (第二病院 眼科)

8. 担癌患者における NK 活性抑制の機序

富松 裕明・堀江 良彰・三橋 牧・

大地 哲郎・浜野 恭一 (第2外科)

山内 克巳・小幡 裕 (消化器内科)

9. 網膜神経回路網形成に参与するセロトニン様

免疫反応型アマクリン細胞

日高 聡・橋本 葉子 (第1生理)

座長 小川 健治 (第二病院外科)

10. HTLV-1 associated arthropathy (HAAP) の

成因に関する分子生物学的アプローチ

北島 勲・佐藤 和人・中嶋ゆう子・

西岡久寿樹 (リウマチ痛風センター)

11. TSST-1応答性ハイブリドーマの樹立とその性状の解析

巖 小傑・今西 健一・

五十嵐英夫*・内山 竹彦 (微生物・*都衛研微生物)

12. 抗 OKT3-二次抗体陽性腎移植患者での

BMA 031投与に関する基礎的検討

早坂勇太郎・高橋 公太・寺岡 慧・東間 紘・

阿岸 鉄三・太田 和夫 (腎センター外科・泌尿器科)

座長 湯村 和子 (腎臓内科)

13. 無症候性キャリアー由来末梢血リンパ球の HBV 抗原遺伝子
導入細胞に対する細胞障害機能の検討 春田 郁子・鴨川由美子・鈴木 義之・
中村 哲夫・孫 野青・石黒 典子・磯野 悦子・
山内 克巳・小幡 裕 (消化器内科)
14. 胃癌患者の宿主側要因一特に細胞性免疫能の立場から一
小川 健治・勝部 隆男・稲葉 俊三・渡辺 俊明・
矢川 裕一・梶原 哲郎 (第二病院外科)
15. 抗リン脂質抗体症候群妊婦の臨床的検討 雨宮 照子・安達 知子・武田 佳彦 (産婦人科)
高木耕一郎・中林 正雄・坂元 正一 (母子センター)
- 座長 佐藤 和人 (リウマチ痛風センター)
16. IFN- γ によるヒト血管内皮細胞の活性化
一MHC クラス II 表現とブドウ球菌外毒素 (TSST-1) 結合性の獲得一
荒明美奈子・今西 健一・巖 小傑・
宮永 幸実・根岸 澄子・内山 竹彦 (微生物)
17. 一つのインスリン自己抗体から作られたインスリン作用を
持つ抗イディオタイプ抗体 内潟 安子・荷見 澄子・平田 幸正 (糖尿病センター)
18. 抗カルジオリピン抗体と臨床像 湯村 和子・松村 治・二瓶 宏・杉野 信博 (第4内科)
座長 今西 健一 (微生物)
19. 小児紫斑病性腎炎における IgA bearing cell の検討 久保田令子・服部 元史・甲能 深雪・
川口 洋・伊藤 克己 (腎小児)
20. 抗原経口投与によるぶどう膜炎発症の研究 神崎 雅子・高野 真綾・
宮永 嘉隆 (第二病院眼科)
21. 鼻アレルギー患者における Fc ϵ レセプターの動態 鍋島みどり・窪田市世・
森田 恵・石井 哲夫 (耳鼻咽喉科)
檜垣 祐子・川島 真・肥田野 信 (皮膚科)
22. HBs 抗原に対する免疫応答における Class 2 抗原の役割 鈴木 義之・春田 郁子・
鴨川由美子・中村 哲夫・孫 野青・
石黒 典子・磯野 悦子・山内 克巳・
小幡 裕 (消化器内科)

1. 肝癌に対する CTL 療法の基礎と臨床

(消化器病センター外科・内科)

有賀 淳・山内 克巳・高崎 健・
古川 隆二・済陽 高穂・次田 正・
小幡 裕・羽生富士夫・小林誠一郎

我々は肝癌に対する新たな免疫療法として自己癌特異的キラー細胞 (CTL) を誘導し肝動注療法を施行している。患者自己単核球を自己癌および rIL-2 と混合培養して誘導された CTL は in vitro にて自己癌特異的で、 α CD3, α CD8 モノクローナル抗体とウサギ補体処理にて抑制される cytotoxicity を示した。この CTL は in vivo においてもヌードマウスに移植されたヒト肝癌の増殖を有意に抑制した。この結果に基づいて治癒切除不能多発肝癌12例に CTL 肝動注療法を

施行し CR 1 例, PR 3 例, MR 3 例の高い有効率を得ている。副作用は軽度の発熱程度であり安全に加療可能であり今後期待される治療と思われる。

2. 放射線全身照射マウス follicular dendritic cell (FDC) 抗原捕捉能

(第2病理) 安藤 明子・長谷川かをり・
西川 俊郎・増田 昭博・笠島 武

マウスに900radの放射線全身照射を行い、脾臓およびリンパ節内にリンパ球の枯渇した状態を作り、この時の FDC の peroxydase-anti-peroxydase complex (PAP) 捕捉能の有無を光顕および電顕で検討した。2.4G2 および 5'-nucleotidase (5NT) を FDC のマーカーとした。照射後24, 48, 72時間の脾臓およびリンパ節について検討した。